『静岡・箱根近代建築の旅』見学会が平成２３年６月３日（金）～４日（土）に開催されました。今年は梅雨入りが早く、天候が心配されましたが、前日までの雨が嘘の様に天候に恵まれた見学会となりました。いつもと同様、バス移動は少々体に苦痛を感じましたが、静岡に入るとそこからは、日本の象徴『富士山』が見える度に盛り上り終始和んだ道中となりました。

【逢妻交流会館】

建物は３層積み重ねの３階建で、外壁や内部スペースなどの壁はその大部分を曲線のガラスで構成されており、昼間は周辺の景色を映すことでその風景と溶け合い、夜間は内部の照明で周囲に明るい穏やかな光を投げかけるような斬新なデザインとなっていました。

敷地は、建物の外周を芝生で囲み、またその他の様々な樹木の演出で、建物と緑の調和を楽しむかの様な魅力ある美しい空間を作っています。気候の良い時期には、交流間の周囲をゆっくり歩いてみたくなります。

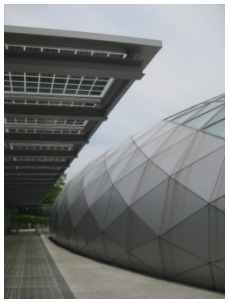
一面ガラス張りのこの館での真夏の対策、窓からの日差しを和らげ、見た目にも爽やかに、利用者に対し癒しの空間となる様、壁面緑化（ゴーヤの緑のカーテン）が施されています。

【豊田市井上公園水泳場】

建物外観は、水滴をイメージしたかの様な卵型をしています。また公園内に建つ施設として高さを抑えながら、周辺の景観を損なわず各室の必要な高さが確保されており、プールの屋根にはガラスのトップライトを設けており、開放感のある親しみやすい空間(プール)となっていました。

この建物は、親しみやすい形となっている反面、施工業者はさぞかし悩み、泣かされたことでしょう。

又、この施設は、オール電化・ヒートポンプ蓄熱にて、ＣＯ２排出削減・省エネルギーを併せ持つ蓄熱方式次世代温水プールとなっていました。



【ねむの木こども美術館】

ふたつの美術館

＜緑の中＞

建物は、ペーパハニカム三角格子・Ｓ構造で作られています。自然の光に包まれた緑の中に静かに佇むガラス張りの美術館には、真っ白な空間に、子供たちが描いた絵、ねむの木学園の美術教育のもと描かれた絵が飾られています。真っ白なキャンバスに自由な発想で描かれた鮮やかな絵には、子供たちの無限の可能性を感じました。

周辺の緑と鮮やかな色使いの作品は一枚のガラスを通しながらも一体感をかもし出していました。

＜どんぐり＞

周囲の緑の中に、まずどんぐりの帽子のような形状の屋根が目に飛び込んできます。切り妻の屋根部分には草が植えられているので、まるで建物自体が、山の斜面から伸びてきているようにも見え、突き刺さっているようにも見えます。また、外壁はわらを混ぜた漆喰がランダムに塗ってあり、ねむの木学園のこども達が描いたカラフルな植物の絵が描かれてあります。

内部は真っ白な漆喰の壁と天井、無垢材の床。
どんぐりの帽子部分の中もギャラリーになっていて、真っ白な漆喰の壁面にまるいフォルムが、まるでかまくらの中のようで、照明のやわらかい光のおかげもあり、こども達の絵にぴったりの暖かい空間となっていました。
＜内部の写真が無く、雰囲気を感じてもらえないのが残念です。＞

【吉行淳之介分学館】

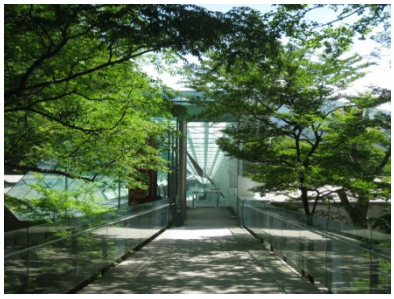
吉行淳之介分学館は、吉行さんの生涯のパートナー・宮城まり子さんが園長をつとめる「ねむの木学園」の傍にあり、真っ青な空と、こんもり盛り上がる森を背景にたたずむ、落ち着きのある和風建築です。

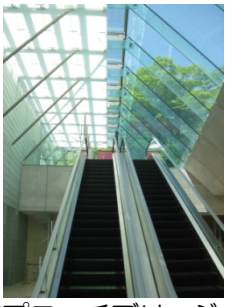
館内には、全著作（約４００冊）をはじめ、手書き原稿、記念品、愛用の品々、写真などが多く展示してあります。

【ポーラ美術館】

建物は、緑豊かな箱根の自然の中に溶け込むように建てられています。地上部分の高さを８mに抑え、そのほとんどを、地下におく事で木々の間に隠れるよう配慮されています。

ゆるやかな傾斜地に巨大なすり鉢状の基礎を造り、免震ゴムを設置して建物を載せるという手法で、人と美術品を地震の被害から守る完全免震構造となっています。又、自然保護の考えから、現場での廃材発生を極力抑えるために全体構造を鉄骨造とし、自然環境との調和を図って杉板型枠のプレキャストコンクリート，自然の景色を写し出すガラス材などの工場生産品を多く取り入れた建物となっています。

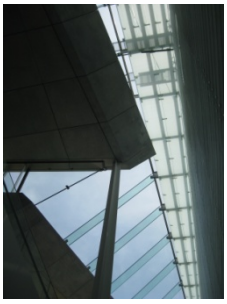




内部へは、森の中に渡されたアプローチブリッジから、最上階にあるガラス張りのエントランスホールへ下りのエレベーターで導かれます。

地下から２階まで吹き抜けたアトリウムロビーはトップライトから自然光が降り注ぎ、館内に居ながらにして森の緑、空の青が鮮明で、自然との一体感を感じます。

各階共、吹き抜けアトリウムを中心に各展示室が配置されているので、来館者が迷う事無くゆったりとした気分で作品を鑑賞し、館内を回遊できるようになっています。また展示室の照明は美術作品が最大限美しく鑑賞できるよう、自然光に限りなく近い光ファイバー照明を採用しています。



【東山旧岸邸・とらや工房】

駐車場を出て山門を通り抜け、竹林に囲まれた小道を散策しながらまずは旧岸邸に到着。

旧岸邸は、第５６・５７代首相を務めた岸信介が晩年を過ごした邸宅で、伝統的な数奇屋建築の美しさと、現代的な住まいとしての機能を両立した建物となっています。和風庭園もあり、美しい自然の中に歴史を刻みつづける空間となっています。

とらや工房も、同じく自然の中に建てられており建物と自然が一体化したように見えます。廻りの自然は小動物の住息環境（ビオトープ）としての役割もはたしています。

建物前面がガラス張りとなっており、工房の作業も見学できるようにつくられています。又、喫茶コーナーでは、自然に囲まれた屋外のテラス席で、日本の四季を感じながら、作りたてのお菓子を頂けるようになっています。

今回見学した建物は、そのほとんどが自然の中にあり、建築物と自然が一体化し、共生しているように感じました。ポーラ美術館のように、自然を残しながらの建築工事は非常に高度な技術が必要になると思いますが、これからの日本には、温暖化問題・ＣＯ２問題などエコが叫ばれる中、このような手法の建築が望まれてくると考えます。これからもこのような建物を実際に見て感じて、自分の仕事に少しでも活かせて、建築を学んでいけたら幸いです。

（記・小林 泰浩　奈良支部）